

大学づくり25年を振り返って～夢を追い続けて



吉田 邦久

駿河台大学での24年の教員生活に終止符を打つことになった。振り返れば、長かったようでもあり、短かったようでもある。世間から見れば、「予備校を母体として、その理事長の意志で、一大学ができて、まだ何とか続いている」というぐらいだろうが、その流れの先端の一滴として奔ってきた当事者である小生にとっては、山あり谷ありの波乱万丈と言ってもよいドラマであった。

小生がこの大学の設立に加わったのは、設立の2年前からで、文字通り川ができる最初の流れの始めからであった。もちろん、そのずっと前から、用地の取得などの努力が設置者である山崎春之氏（学園長）のもとで始められていたのだが、どのような理念に基づいて大学をつくるかを考えたのは、早稲田大学名誉教授の星川長七氏、慶応大学教授の田中實氏、明治大学教授の和田英夫氏、東京大学名誉教授の松本三之助氏、それに立教大学教授だった小生の5人が、教員側の設立委員として、ソフト面の立案に加わってからであった。東京6大学に入っていないのは法政大学だけという布陣だと言って互いに笑ったものであった。議長はいつも星川長七氏が務めたが、事務局として駿河台学園教務部長だった中塚晃介氏と文部省から来られたばかりの久保田晃氏が学園側として加わっていた。

大学の設立に至る、そのあたりの経緯の詳細については、小生が編纂委員長を務めて作成した『駿河台大学20年史』に書かれているので、ここでは書かない。ここでは、主観的な駿河台大学観を書きとどめておくことにしたい。

設立準備委員会ができて、初めの頃は、まず、「どういう大学をつくるのか」についての議論が繰り返された。「国際化情報化に対応」というのが学園長から出されていたが、小生としては、そのようなことよりも、質的にどのような大学をつくるかのほうが重大事であった。しかし、多くの委員は法学部の専門のほうのカリキュラムに関心があり、生物学という異なる畑で一般教育（教養）を担当していた小生とはかなり関心がずれていたように思う。そこで小生は、学生に何を与える大学にす

るのか、学生がどのように感じる大学をつくろうとしているのかが大事ではないか、という、問題提起を繰り返していた。そのへんの思いは、当時（今から26年前）の駿台予備学校が出していた『駿台新聞』に、「大学は今」と題した拙文を書いているので、少し再録したい。

この文は、駿台予備学校の受験生に語りかけるものとなっていて、まず、大学に一年前に入学した元駿台生に大学の印象を聞くと、大半の学生が「講義は専門用語の羅列で解りにくく、スピードは速く、面白くなく、期待はずれ」「授業の雰囲気も予備校のように張り詰めたものでなく、先生はひとりで古いノートを見ながらボソボソ」「授業出席率はどんどん下がって行くが、試験前になると近くのコピー屋が大繁盛」などと答えると述べ、学生は単位と卒業生のために仕方なしに勉強している者が多い、と勤務大学（立教大学）の現状を嘆いている。一方、教員の実態について述べ、「学生の学力が低下してきており、やる気のある学生は少数。それだけを相手にするしかない」「我々は自分の好きな研究が本業で、授業は給料のためのノルマ」「学問は難解なのは当然、わからないのは学生が悪い」などの教員の声を挙げている。そして、次に「大学は変わらねばならない」との小見出しで小生の思いが続く。ここから、原文のまま引用しておくことにする。

さて、大学は一体どうしたらよいのであろうか。内実がこんなに空虚になっており、矛盾だらけなのだから、ともかく大学が実質的に価値のあるものにならなければならないことは間違いない。しかも、それは一部の手直しではどうしようもない状態であり、カリキュラム、講義のやり方、学生・教員・職員の考え方と行動、キャンパスメイキング、クラブ活動など各面における全面的改革が必要になってきていると小生は考える。そして、その際もっとも重要なことは、すべての学生の人間形成に本当に役立つ大学にしなければならないということだろう。従来の大学は、あまりにも教員中心でありすぎたと思う。

そして、「駿河台大学に夢を託す」との小見出しで、

小生はたまたま駿台予備学校に関係していたため、大学の設立にあたって相談にのることになった。そして、結局自ら駿河台大学に移ることになってしまったのである。（中略）新しい大学像を新設の駿河台大学で追い求めてみようと思ったのである。その実現は大変なことではあるが、可能性は十分あると思っている。

さらに、「駿河台大学の目指すもの」の小見出しが続き、「学生のもつ多様な目標を実現させる大学に」というのに続けて、「予備校的大学でありたい」と述べ、「勉強の内容の面白さや重要性を講師が何とかわからせたいと努力し、学生もそれがわかりたいと思うから熱心になれるのではないだろうか。大学でもそうなることは不可能ではないと思う」とある。

今読み返しても、小生の思いは何も変わっていないと思う。この気持ちで、おこがましいが、数々の提案をし、多くの教員の協力のもと故山崎春之総長の理解も得て、実現に漕ぎつけてきた。演習の必修化、初年度からの実施、オリエンテーションキャンプ、社会の現場で活躍している人に学ぼうと設置した特別講師制度、話題を呼び見学ひっきりなしになったAVセンターとAV設備、学生寮の設置、女子ホッケー部に始まるスポーツ振興政策、もっと気軽に海外体験をといろいろな国に出かけ協定校を増やした留学生制度、そして、「まちを教室に」の合言葉で実施してきたアウトキャンパススタディ、オーバーナイトウォーク、学部 day、学生の出身校訪問など、枚挙にいとまがないぐらいである。そして、この約25年間に、法学部、経済学部、文化情報学部、現代文化学部、心理学部と、学部や大学院研究科の増設に努め、多くの学生の多様な目標実現を支援するようになってきた。

振り返ってどう自己評価するかであるが、小生の満足度は高い。自己満足と言われればその通りであるが、数々の夢を追い続けることできた。そして、「誇れる大学」に成長してきたと思う。とくに、最後の10年間に力を入れた、国際交流・地域連携・スポーツ振興は、十分胸を張ることができる。経済状況の変化や18歳人口の減少という荒波にもまれ、志願者が減少し入学してくる学生の学力レベルがかなり低下したことは否めないし、その向上を望むものではあるが、それは本質的なところではない。大学大衆化によって、かつてならば大学に進学しない学力の高校生も進学してくることになり、本学はどちらかと言えばそのような学生が多くを占めるようになってきた。しかし、そこで、「学生の質が悪いから、よい教育ができない」と言ってしまえば、前述の駿河台大学設立当時に大学の教員がぼやいていたのと同じになってしまう。

小生は「駿河台大学は大学教育の最前線」だと思っている。現在存在するかなりの大学が抱えている典型的な問題に挑戦しているのである。これまでの大学が経験したことのない「戦場」に踏み込んでいて、一見そこは泥沼に見えるが、そこで、一人ひとりの学生を全人格的に伸ばし、価値をつけて社会に送り出すことに成功すれば、大学の新しい存在価値を確立することになるのではないかと思うのである。先

の『駿台新聞』の文の最後には、「(不安なことは数多いが) 数々の困難を乗り越えて、従来の大学にない、あるいは従来の大学を超える魅力のある大学にして行こうという努力はかならず報われると確信している」とあるが、その気持ちもそのままである。どうか、ひとりでも多くの教職員が、この認識を受け継いでいただき、駿河台大学の存続と発展に成功されることを心から願い、筆を置くことにする。